

相手の発話に応じて話す力を高めるための中学校英語科学習指導の在り方（第一年次）

－主体的な気付きを促す単元を貫く言語活動の工夫を通して－

長期研究員 石井 愛

《研究の要旨》

本研究では、中学校英語科において、相手の発話に応じて話す力の育成を目指した。そこで、生徒が、対話を継続・発展させる視点を明確にして言語活動を行い、適切な英語表現に気付くことができるようにした。言語活動をつなぐ省察の場と、自身の成長を実感し、課題を見付けて授業をつなぐ振り返りの場の工夫により、主体的な気付きを促した。その結果、単元の中で自身の学びをつなぎ、相手の発話に応じて話す力を高める生徒が増えた。

I 研究の趣旨

中学校学習指導要領解説外国語編では、「話すこと [やり取り]」の領域が新たに設定された。やり取りを行う際は、相手の発話に応じることが重要であり、それに関連した質問や意見を述べるなどして、対話を継続・発展させなければならないと示されている。さらに、互いの考えや気持ちなどを伝え合う対話的な言語活動が一層重視されていることや、言語の働き^{※1}を適切に取り上げて指導することが明記され、「話すこと [やり取り]」の領域が重要であることが読み取れる。

しかし、令和5年度全国学力・学習状況調査中学校英語科における調査問題の「話すこと [やり取り]」の全国正答率は14.5%であり、落ち込みが見られた。その中でも、「疑問文の特徴を理解するとともに、その知識をやり取りの場面において活用できる技能を身に付けているかどうかをみる」設問の正答率は13.4%、無解答率は19.4%であった。このことから、やり取りの場面において、既習の英語表現を活用し、相手の答えや自分のことについて伝えたことに関連する質問を付け加えることで対話を継続・発展させることに課題があると言える。

また、これまでの全国学力・学習状況調査の報告書には、「話すこと [やり取り]」の指導に当たっては、繰り返し言語活動を設定することと、生徒自身が対話を継続・発展させる方法を知り、その有用性に気付き、意識的に活用できるようにすることの必要性が示されている。

しかし、これまでの自身の授業を振り返ると、対話の前に英語で書いた文章を、互いに伝え合うだけの形式的な対話を行う授業であった。そのため、生徒自身が対話を継続・発展させる方法を考える機会がなく、生徒が話す際に、相手の発話に応じる意識をもたせることができていなかった。

そこで、本研究では、相手の発話に応じて話す力を「相手の発話を受け止めながら対話を継続・発展させる力」と定義し、その力を高めることを目指す。そのために、

対話を継続・発展させるための視点と有用な英語表現に気付き、それを活用すること（以下、「主体的な気付き」^{※2}）ができるようにする。単元を通して、「主体的な気付き」を促すことで、生徒が、対話を継続・発展させる方法の有用性を感じ、対話の中で活用する姿につなげたい。

※1 中学校学習指導要領解説外国語編では、言語の働きとして、「コミュニケーションを円滑にする」、「気持ちを伝える」、「事実・情報を伝える」、「考えや意図を伝える」、「相手の行動を促す」の五つが挙げられている。

※2 和泉伸一（2024）は、言語習得における「気づき」は、「学習者が文脈の中で自然な言葉の使われ方を理解し、自ら使っていくために重要な要素」と述べている。このことから、本研究では、既習の英語表現を活用するために、生徒の気付きが大切であると考え、本研究における気付きは、視点やそれに基づく英語表現に関わるものとし、活用まで含むものを、「主体的な気付き」と捉える。

II 研究の概要

1 研究仮説

中学校英語科の授業において、以下の手立てを講じれば、相手の発話に応じて話す力を高めることができるだろう（図1）。

【手立て1】対話を継続・発展させる視点の明確化

【手立て2】言語活動をつなぐ省察の場の工夫

【手立て3】授業をつなぐ振り返りの場の工夫

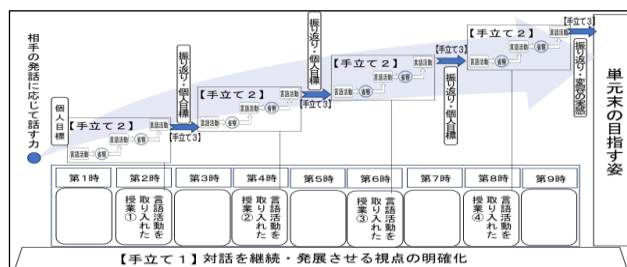


図1 単元構想図

2 研究の内容

(1) 【手立て1】対話を継続・発展させる視点の明確化

言語活動の際に、言語の働きを基にして適切な英語表現に気付くことができるようにする。そのために、言語の働きを基にした、対話を継続・発展させる視点（以下、視点）を明確にする。

まず、対話が進まない場面の動画から視点を見いださ

せる。次に、対話を継続・発展させることができている動画や教科書等から、見いだした視点に基づく具体的な英語表現に気付くことができるようにする。さらに、生徒が、見いだした視点と英語表現を対話の中で活用できるように、「話を続ける Tips」として全体で共有する。

(2) 【手立て2】言語活動をつなぐ省察の場の工夫

生徒の「主体的な気付き」を促すことができるように、「話すこと[やり取り]」の言語活動を取り入れた授業(以下、授業)で、言語活動を複数回設定し、さらにその言語活動の間に省察の場を位置付ける。

まず、言語活動を設定する。次に、省察の場において、全体共有、音声記録の振り返り、ペアでの話し合い等を通して、言語活動での自身の発話について、視点に基づき振り返り、どのような英語表現が適切かを考えさせる。そして、省察の場で学び得た英語表現を活用できるように、言語活動を再度設定する。そうすることで、生徒自身が、言語活動における自身の発話から、新たな視点や英語表現への気付きを、次の言語活動につなぐことができるようにする。言語活動の回数は、生徒の実態や単元のテーマ、教科書本文の内容等に応じて設定する。

(3) 【手立て3】授業をつなぐ振り返りの場の工夫

生徒が、単元を通して、授業での学びをつなぐことができるように、授業の終末に振り返りの場を位置付ける。

まず、視点に基づく自身の成長を実感したり課題に気付いたりするために、自身の発話や省察の場での学びを振り返らせる。また、前時の自身の振り返りや、視点を意識している生徒の記述を生かして、次時の個人目標を設定させる。そうすることで、視点や英語表現についての生徒自身の気付きを、単元を通して生かし、言語活動で活用することができるようにする。

3 研究の実際

対象生徒	第1学年 66名 (2学級)
授業実践Ⅰ	Unit4 Friends in New Zealand (10時間)
授業実践Ⅱ	Unit7 Foreign Artists in Japan (9時間)

(1) 【手立て1】について

ここでは、授業実践Ⅰを中心に述べる。単元の初めに、対話を継続・発展させる力を高めるために、「英語で自然な会話を1分間続け、深める力をつける」と、単元末の目指す姿を生徒と共有した。「自然な会話」についての具体的な姿を問うと、「沈黙が少ない」、「間がない」、「言葉のキャッチボール」、「反応する」等の意見が出された。これらの姿を意識し、言語活動を行うことを確認した。

まず、教師とALTによる、沈黙が続いて対話が進まない場面の二つの動画を視聴させた。一つめの動画視聴後、沈黙が続いた理由を問うと、ある生徒は、「相手が何

と言っているか分からないから」とつぶやいた。そこで、対話を続けるための方法を問うと、生徒は、「もう1回言って、と言いたい」と、「聞き返す」視点を見いだした。そのため、次に、具体的な英語表現を想起させるために、聞き返すための表現を用いた別の動画を視聴させた。生徒は、動画から“Sorry?”という具体的な英語表現に気付き、既習表現を、視点に基づいて新たに活用できるように捉え直していた。対話が進まない二つめの動画視聴後も同様に、沈黙が続いた理由を問うと、ある生徒は、「何と云えばよいか分からないから」とつぶやいた。そこで、対話を続けるための方法を問うと、生徒は、「とりあえず何か言ってつなげたい」という考えから「つなぎ言葉」の視点を見いだした。「何か質問したい」という考えから「関連する質問」の視点を見いだした。「つなぎ言葉」の視点については、間を埋めるための英語表現には何があるか問いかけた。すると、生徒は、教科書から“well.”という既習表現や、未習である“Let’s see.”という具体的な英語表現を探し出した。「関連する質問」の視点については、具体的な英語表現を教科書から探すよう促した。すると、生徒は、部活動がテーマの場合、“Where do you practice?”のような表現を活用できることや、“When is the next concert?”の“concert”を“game”に変えれば、運動部にも応用できると考えた。このような、視点に基づき、言語活動の際に活用できる具体的な英語表現を想起する姿を見取ることができた。その後も同様に、言語活動と動画の視聴を繰り返す中で、「反応する」、「賛成する」、「話を振る」、「+1文」等の視点を見だし、それらに基づき、具体的な英語表現を既習表現から想起した。このようにして、生徒が見いだした視点と具体的な英語表現を、「話を続けるTips」にまとめ、言語活動で活用できるように生徒と共有した(図2)。生徒は、言語活動や省察の場で、「話を続けるTips」を参考にしていた。自身にとって必要な視点や有用な英語表現を探したり、新たに付け加えたりしながら活用する姿が見られた。

以下、本文中の〈 〉は、授業で共有した視点を表す。

話を続けるTips

- 1 聞き返す
- 2 つなぎ言葉
- 3 繰り返す
- 4 反応する
- 5 褒める
- 6 賛成する
- 7 関連する質問を続ける
 - ① 話題を深める
 - ② 話を振る
 - ③ 新しい話題へ
- 8 +1文で気持ち・意見を伝える
- 9 +1文で事実・情報などを伝える
- 10 エールを送る

4 反応する
 Good. Cool. (いいね) Great. (すごいね) I see. (なるほど) Wow. (わあ)
 Really? (本当?) Right. (そうね) Sounds like fun. (楽しそうだね)
 That's nice (interesting / good / great / amazing / awesome). (～だね)
 Sounds nice (interesting / good / great). (～そうだね)

図2 「話を続ける Tips」で共有した視点と英語表現

(2)【手立て2】について

ここでは、授業実践Ⅱについて述べる。本実践では、全9時間のうち、「話すこと[やり取り]」の授業を4時間

授業①	どちらになりたい？考えを伝え合おう
授業②	どちらが好き？おすそめを伝え合おう
授業③	日本の秋に楽しむことは？
授業④	あなたのヒーローは誰？

図3 授業での言語活動のテーマ

位置付けた。言語活動のテーマは、単元のテーマや教科書の内容に基づき、それぞれ異なるものとした(図3)。

まず、全体共有による省察を通して、「主体的な気付き」につながった生徒について述べる。授業②での1回目の言語活動では、対話が継続しない状況が多く見られた。そのため、全体で省察を行うことで、視点に気付くことができるようにした。どうしたら対話を継続・発展させられるかを問うと、〈関連する質問〉が必要であるとの発言があった。視点に気付くことができたものの、質問したい内容が浮かばない生徒が多く見られたため、日本語で考えてから、英語表現を考えるようにした。生徒から出された、「親子丼とはどんなものか」、「1番好きな刺身は何か」などの質問を、既習表現を基に、“What is Oyakodon?”, “What is your favorite raw fish?”などと英語で表現し、全体で共有した。その後、2回目の言語活動を行った。1回目の言語活動で一度も質問できなかった生徒Aは、全体で共有した“What is your favorite raw fish?”の表現の有用性に気付き、対話の中で活用していた。その後の省察の場では、全体共有や「話を続けるTips」から有用な英語表現を探した。すると、3回目の言語活動では、2回目までに有用性を感じた〈関連する質問〉の表現から、“What is your favorite raw fish?”を活用しようとした。しかし、相手が先に用いたため、同じ質問をするために、これまでに活用したことのある、“How about you?”という〈話を振る〉表現を活用し、対話を続けた。この生徒は、全体共有を通して、〈関連する質問〉の有用性に気付いただけではなく、相手の発話を受け止めながら、対話を継続・発展させるには、他の視点も必要だと気付くことができた。

次に、音声記録の振り返りによる省察を通して、「主体的な気付き」につながった生徒について述べる。生徒Bは、〈反応する〉ことを目標として言語活動を行った。授業③での1回目の言語活動後の省察の場では、音声記録で自身の発話を客観的に振り返り、“Good.”ばかり使っている」とつぶやき、他の既習表現を探した。2回目の言語活動では、“Good.”以外の“Oh, really?”の表現を活用した。その後の省察の場では、〈反応する〉に基づき、全体共有や「話を続けるTips」から有用な英語表現を探した。すると、3回目の言語活動では、新たに“Great.”

と〈反応する〉表現を活用することができた。この生徒は、音声記録の振り返りを通して、自身の発話の特徴を知り、〈反応する〉表現の中から、自身が活用できる英語表現を探したり、対話で活用したりすることができた。

さらに、ペアでの話し合いによる省察を通して、「主体的な気付き」につながった生徒について述べる。生徒Cは、授業④での1回目の言語活動において、〈繰り返し〉、〈反応〉、〈関連する質問〉を活用したが、対話を継続させることができなかった。その後の省察の場では、教科書の内容から、対話を継続・発展させるための他の視点を探し、〈+1文で気持ち・意見を伝える〉が活用できると気付いた。それを参考に、自身が伝えたい気持ちを考え、英語表現を調べた。2回目の言語活動では、調べたことを基に、自身の言いたいことを相手に伝えることができた。しかし、その後の省察の場で、対話の中で相手の気持ちや意見を十分に受け止めることができていなかったことを振り返った。そこで、〈+1文〉の活用の仕方について、ペアで相談した。その結果、3回目の言語活動では、“Oh, study!”と〈繰り返し〉たり、“Oh, good. Cool.”と〈反応〉したりした上で、“I want my brother to be like him.”と、自身で調べた〈+1文〉を活用するなど、相手の発話を受け止めながら対話を継続・発展させることができた(図4)。

2回目 A: Who is your hero? C: My hero is Malleus Draconia. A: Who is that? C: He is a twisted wonderland in the game character. A: Oh, nice. C: He is... He will heal me when I am tired. <+1文> And (it's) cute. <+1文> And he's so lonely... <+1文> (時間切れ)	3回目 C: Who is your hero? A: My hero is my brother. C: Why? <関連する質問> A: He is brave and helps me. And it's (he's) kind. He can study hard. C: Oh, study! <繰り返し> A: Because (he) want(s) to go to Fuzoku junior high school. He's very cool. C: Oh, good. Cool. <反応> I want my brother to be like him. <+1文> A: Nice. What does he like? C: He likes ... (時間切れ)
--	---

図4 授業④における生徒Cの発話の変容

(3)【手立て3】について

ここでは、授業実践Ⅱについて述べる。単元を通して、授業での学びをつないだ生徒Dは、授業③の振り返りで“I see.”, “Great.”, “Wow.”の反応が言えるようになった」と記述していた。それを踏まえて、授業④では「前の授業での〈反応する〉表現を活用して間がなくなるように会話をしたい」と個人目標を立て、言語活動を行った。振り返りには「前の授業で使った〈反応する〉表現を繰り返し使うことができた。〈+1文〉を言うことができた」と記述していた。個人目標の達成に加えて、授業②でできるようになった〈+1文〉の表現を生かし、“Because they will help me.”と〈+1文で気持ち・意見を伝える〉表現を活用したことが分かった。このことから、これまでの授業から視点に基づく自身の成長を突

感じ、課題を明確にしなが、具体的な個人目標の設定につなげる姿が見取れた。

さらに、他者が用いた視点により、新たな気付きを得て学びをつないだ生徒Eは、授業①の振り返りで、「〈反応〉がうまくできなかった」と自身の課題を記述した。授業②では、この課題に加え、全体で共有した、「〈+1文〉で情報を伝えることができた」という前時の他者の振り返りを生かして、個人目標を「〈+1文〉をして、〈反応〉をできるようにする」とした。振り返りでは、自身の発話の変容として、「答えた後の〈+1文〉や〈反応〉が前よりも上手になった」と記述しており、他者から得た新たな視点を基に、学びをつなぐ姿が見られた。授業③では、前時での自身の課題が改善されたことで、次時での目標が見えにくくなっている様子が見られた。そこで、全体共有の場面で、「〈関連する質問〉でいつもより長く会話できた」、「相手に何回も質問できるようになった」という内容と具体的な英語表現を共有した。すると、生徒Eは、全体共有を受けて、個人目標を「〈関連する質問〉をできるようにする」と設定した。振り返りでは、「相手が質問に答えた後に〈関連する質問〉の“What is your favorite sport?”と質問することができた」と記述していた。授業④では、「〈話を深める〉」ことを個人目標とし、〈関連する質問〉を活用し、言語活動を行った。対話の中で、“What is your favorite anime?”と、前時に自身が活用した〈関連する質問〉の英語表現を生かし、自身の学びをつなぐことができた。

Ⅲ 研究のまとめ

1 検証と分析

(1) 相手の発話に応じて話す力の高まりについて

相手の発話を受け止めているやり取りを、「質問—答え」、「発話—反応」、「反応—発話」と捉え、その回数を音声記録から数え分析した。回数が多いほど、対話を継続・発展させられていると考え、次のように検証した。授業実践Ⅰの授業①の最後の言語活動と、授業実践Ⅱの授業④の最後の言語活動での回数を比較すると、学年平均が、2.93回から5.62回となり、有意に増加した^{※3}。

そこで、相手の発話を受け止めているやり取りの回数が大きく伸びた生徒Fについて分析した。音声記録によると、相手の発話を受け止めているやり取りは、1回から6回に増えていた。視点の活用数の割合を見ると、様々な視点を活用していることと、授業実践Ⅱで、〈関連する質問〉の割合が増えていることが分かった(図5)。全体共有による省察の場で、〈関連する質問〉の活用について確認したことで、意識的な活用につながったと推察され

る。〈賛成する〉が減ったのは、授業実践Ⅱの言語活動のテーマが、賛否を問うものではなかったからだと考えられる。生徒は、「〈関連する質問〉はできたけれど〈反応〉に困ったので、前に使ったものを活用したい」と振り返っており、視点に基づき、自身の成長を実感したり、課題に気付いたりした。そして、それを改善するために、既習表現を生かそうとしたり、「まだ使っていない表現を活用したい」と、新たな視点や英語表現を探したりするなど、学びをつなぎ、広げる姿が見られた。このことから、言語活動の後に省察を行い、それを繰り返すことが、生徒が視点を意識し活用する、「主体的な気付き」を促すことにつながると考える。

※3 t検定, $p < 0.05$, $d = 1.18$ (効果量大)

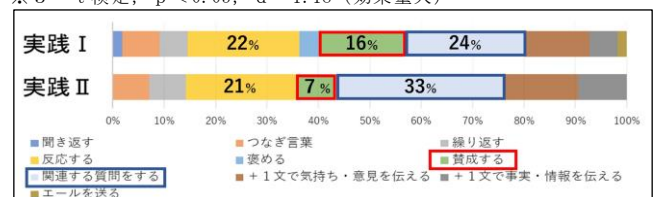


図5 生徒Fの視点の活用数の割合
(2) 「主体的な気付き」が促された姿について

「主体的な気付き」が促された姿を、言語活動の中で視点を活用する姿であると考え、個人が活用する視点の個数の平均を出し、相手の発話に応じて話す力との相関について分析すると、強い正の相関が確認できた^{※4}。

一方、相手の発話を受け止めているやり取りの回数が伸びず、「主体的な気付き」が促されなかった生徒もいた。対話を継続させようと、〈反応〉や〈話を振る質問〉などの表現は活用できたが、対話を発展させるために、〈関連する質問〉や〈+1文〉などの活用はできていなかった。

※4 相関係数 $r = 0.78$ 。相関係数 r の基準として、 $0.20 \leq r < 0.40$: 弱い正の相関、 $0.40 \leq r < 0.70$: 中程度の正の相関、 $0.70 \leq r \leq 1.00$: 強い正の相関とする。

2 成果と課題

(1) 研究の成果

言語活動の繰り返しや、自身の発話についての具体的な省察や振り返りをする中で、相手の発話を受け止めながら対話を継続・発展させることができた生徒が増えた。また、教師が言語の働きを意識して授業を組み立てることで、生徒が視点や英語表現の有用性を感じ、自ら活用する姿につながることが分かった。

(2) 今後の課題

対話を発展させることに個人差が見られた。対話の目的や、テーマ等の場面、相手の状況等に応じて、適切な視点や英語表現を選び、活用できるようにすることが必要である。生徒が、相手の発話に対する自身の考えを伝える方法を見いだしたり、自らの発話を客観的に振り返ったりすることができる手立てを考えていきたい。